

〔論 文〕

内モンゴルにおけるモンゴル語の文字改革の問題

—終戦後のモンゴル人民共和国「新文字」の影響を中心に—

フフバートル

Reform of Mongolian Writing System in Inner Mongolia:
The influence from the Mongolian People's Republic after the end of World War II

BORJIGIN Huhbator

Ethnic Mongolians have used traditional Mongolian script since the 13th century. However, in the 20th century there have been various reforms of their writing systems. In the Mongolian People's Republic, in the 1930s, Latin script was introduced, and in the 40s, use of the Mongolian Cyrillic script was mandated. At that time in Inner Mongolia, there was a similar aspiration for Latinization. After World War II, in Inner Mongolia, a movement to encourage voluntary learning of the Cyrillic script used in the Mongolian People's Republic occurred. In July 1955, the government of Inner Mongolia Autonomous Region introduced the Cyrillic script officially, but because of the change of language policy for minorities by the Chinese government, the campaign encouraging use of the Cyrillic script was canceled in March 1958.

This paper explores the social significance of the reformation of the Mongolian writing system during the 20th century and shows how the Cyrillic script was introduced from the People's Republic of Mongolia into the Inner Mongolia. The author reconsiders the meaning of the reform of the writing system in today's Inner Mongolia.

Key words: Mongolian language (モンゴル語), reform of writing system (文字改革), unification of the written and spoken language (言文一致), Latinization (ラテン化), Cyrillic script (キリル文字)

はじめに

日本の「明治維新」以降、アジアにも国民国家が登場し、その政治的文化的影響が次第に東アジアの国々に及ぶようになった。それにより、東アジア諸国では国民統合の重要な一環として近代教育及び定期刊行物など近代出版事業が発達し、書きことばの「言文一致」が進められてきた。その推進にあたり、漢文をはじめとする古典的な表記システムを改善することが重要な課題となった。そのため、20世紀以来、東アジアでは表意文字の漢字をローマ字など

の表音文字に改める志向が強く示されるようになったほか、新生ソヴィエト社会主義共和国連邦では領域内の多くの言語の文字をいったんはローマ字にし、その後キリル文字に改めた。この文字改革にはロシア共和国の一部であったブリヤート・モンゴル自治共和国とモンゴル系のカルムイク自治州（現ロシア連邦ブリヤート共和国などとカルムイク共和国）が含まれていたほか、モンゴル民族の独立国家であったモンゴル人民共和国も含まれていた。モンゴルは漢字圏の国や民族に属さず、チンギス・ハーン時代（13世紀）から使われてきた伝統的なウイグル式モンゴ

ル文字をもって 20 世紀を迎えた。この文字は、歴代において度重なる改革を経験しながら現在も中国領内のモンゴル民族の間でメディア、教育、出版など日常生活に用いられている。

ところで、ソ連のアジア系の国々を含むアジアでの文字改革を単に「文字を改めた」とみるのは一面的な見方にすぎない。20 世紀のアジアにおける文字改革には日本語の「言文一致」ということばに象徴された新しい書きことばへの脱皮を目指す模索や新しい書きことばを創出するための試みがあった。1921 年に社会主義革命により事実上独立を果たし、1924 年にモンゴル人民共和国として現れたモンゴル民族の国民国家が直面したのも古い書きことばの改善の問題であり、それが次第に文字改革へとエスカレートした。しかし、書きことばの改善や新しい書きことばの創出のため、文字改革が行われ、または文字問題が議論されたのはモンゴルだけではなかったので、モンゴル人民共和国での文字改革を単にソ連の政治イデオロギーの産物のようにみるのも一面的な見方にすぎない。

伝統的なウイグル式モンゴル文字は、音節の多寡を問わず一語が一文字として綴られる縦書き文字で、表記法が話しことばとは大きくずれている。話しことばとの主な相違点は、多くの方言に 7 つの母音があるのに対し、ウイグル式モンゴル文字の母音文字は 5 つだけである。それに、子音 k と g 及び t と d がそれぞれ同じ文字で書かれ、弁別ができない。また、話しことばで長母音になっている発音がいくつかの異なる形で表記されるほか、文法の基本である格語尾と動詞の時制語尾などが話しことばと大きく異なる。このようにウイグル式モンゴル文字は、話しことばを基盤に創出されるべき新しい書きことばの表記には不向きであった。そのため、モンゴル文字の表記法の改善、または、文字改革を試みたのは独立国の形を整えていたモンゴル人民共和国だけではなかった。社会主義化がモンゴル人民共和国より 20 数年遅れた内モンゴル側でも 20 世紀初頭にモンゴル語をラテン文字で表記することを試みたという報告があるほか、中国にいたモンゴル人知識人たちが日本に留学していた内モンゴルからの学生たちも

モンゴル語のラテン文字化を目指して議論をし、行動を起こしていた。それに、伝統的な表記法とは異なる話しことばの発音に基づく表記法によるモンゴル語のテキストが出版されていたのも、モンゴル文字の改善を目指す志であった。

やがて、1945 年 8 月に日本による内モンゴルの支配が終了すると、モンゴル人民共和国との政治的統一を果たせなかった内モンゴル側では、モンゴル人民共和国との文化的一体性を図り、モンゴル人民共和国の新語、文学、芸術、教育、出版、モンゴル研究などの新しい文化を積極的に導入し、その後の新設内モンゴル自治政府とそれに次ぐ内モンゴル自治区の民族文化、教育の基盤を充実させてきた。それに伴い、内モンゴルでは個人や集団レベルでモンゴル人民共和国のキリル文字——「新文字」を自主的に学んだ。それが 1955 年 7 月に自治区政府が「新文字」を導入した際、精神的、実践的基礎となった。それは、社会主義の「先進的な」国——モンゴル人民共和国というモンゴル民族の独立国に対する憧れに起因するものでもあった。しかし、1958 年 3 月には「新文字」の導入からわずか 3 年で、中国政府が少数民族言語政策を変更し、少数民族の文字改革は「漢語拼音方案」によって行うべきであると定めたため、モンゴル人民共和国のキリル文字による文字改革は中止された。

いずれにせよ、伝統的なモンゴル文字に対するモンゴル人の文字改革の試みは、どれも新しい時代にふさわしいモンゴル語の近代化を目指すモンゴル人の志向を示す行動であった。そのため、モンゴル語の文字改革については、20 世紀の東アジアにおける社会変動に伴うモンゴル人の歴史と社会的活動の一環として考察するべきである。特に、本論で主として取りあげる第二次世界大戦終了後の内モンゴルにおけるモンゴル人民共和国の「新文字」学習運動は、キリル文字に象徴される新生モンゴル人民共和国の新しい文化を体系的に受け入れる、またはそれを学ぶという意味において、民政ともに積極的に取り組んだ内モンゴルの社会史に残るできごとであった。したがって、本論ではこうした社会学的な視点も取り入れながら、20 世紀前半における内モンゴ

ルの文字改革の志向を回顧し、1940年代後半から1950年代後期まで内モンゴルで進められたモンゴル人民共和国の「新文字」の自発的学習と政府による導入についてその実態を明らかにし、その研究成果をもって伝統的なウイグル式モンゴル文字の改革に見る現代的な意義を考え直す契機としたい。

一、20世紀のモンゴル文字改革をめぐる「旧」「新」の対比とその「近代性」

20世紀初頭、内モンゴル東部のハラチン右旗王府でラテン文字によるモンゴル語の新聞が発行されていたという、モンゴル語定期刊行物の研究にとってたいへん興味深い情報があった¹。モンゴル語をローマ字で表記した早期の試みという意味でもその情報や資料の価値は高いと考えられる。そういうふうにモンゴル語のラテン文字表記を試みたのは、20世紀初期に内モンゴルで社会の改革を進めたことで知られているハラチン右旗のグンセンノロブ王であった。資料の内容は次の通りである²。

グンセンノロブ王は旗民に文盲が多すぎると感じ、相当広い範囲にわたる旗内識字運動を展開させた。彼が行った具体的な方法は、ラテン文字（英文字母）で一種の簡易なモンゴル語字母と綴り法を作成し、それを先に軍隊で試行し、次第に旗民の男女老若に広げた。グンセンノロブ王の60歳高齡の母親もこの識字運動に参加した。話によれば、彼女がリードしたため、数か月も経たないうちに成果がはっきり見られ、大多数の人が新聞が読めるようになったそうだ。

これはグンセンノロブが同旗で『嬰報』という新聞を発行したことと関連があるような内容なので、時期は1905年ころであろう。しかし、このラテン文字モンゴル語の「新聞」が確認されていないばかりでなく、それとかかわりが深いと考えられる『嬰報』という新聞自体が確認されていない。モンゴル語定期刊行物研究で『嬰報』をモンゴル語で *nilq-a sedgöl* と呼んできた³のも、あるいは、*Ying buu sonin* と記述している⁴のも史料に基づくものではなく、中国語からの推測にすぎない。というのは、

sedgöl と *sonin* が「雑誌」や「新聞」の意味で使われるようになったのはそれよりずっと後であったからだ⁵。したがって、もしこの報告内容が事実であるなら、20世紀初頭にハラチン王府ですでにモンゴル語のローマ字化が試みられただけでなく、ローマ字によるモンゴル語の簡易な正書法が作成され、新聞まで発行されていたということになる。こうなれば、グンセンノロブによるモンゴル語のラテン文字化は、バザル・バラードィンの主張により1910年にラテン文字表記を発表したロシア領のブリヤート・モンゴルよりも数年早かったことになり、ソ連の統制や政治的影響下にあったモンゴル語地域で行われたラテン化運動より20数年も早かったことになる⁶。ソ連で試みられたラテン文字化への動きの中で、もっとも早く知られている例はアゼルバイジャンの1922年であり、ソ連の影響下にあったモンゴル語地域においては、その公式の表明は、1931年1月のモンゴル文字ラテン化モスクワ会議においてであった⁷。このモスクワ会議について、中国で刊行されていた『新蒙月刊』は「国外新聞」欄で「蘇俄侵略蒙古之野心」（ソビエト・ロシアのモンゴル侵略の野心）というタイトルで報道し、「文化方面の侵略で、モンゴル文字をラテン化しようとしている」と批判している⁸。

モンゴル文字改革の試みは歴史上度々行われていたが、ラテン文字の「近代性」をそのころのグンセンノロブはすでに認識していたのであろう。しかし、グンセンノロブのこうした認識は決して彼独自の発想によるものではなかった。中国では早くからヨーロッパの宣教師たちが漢語系の諸言語や方言をラテン文字で表記し、記録していたほか、1898年には「併音字譜」と「切音新法」という文字が現れ、ラテン文字が使用されていた⁹。改革派であったグンセンノロブはこうした文字改革の動きにも注目したのであろう。実際、彼がどういうことからヒントを得て、何を参考にモンゴル語のラテン文字を作ったか、その綴り法はどのような構成をしていたのかはたいへん興味深いことである。

ここに記すべきことは、共産主義者たちにとって「革命とインターナショナル文化の文字」であった

ラテン文字を、モンゴル人たちは一方では「近代」として受け入れたことである。モンゴル人民共和国の作家で、革命政府のイデオロギー宣伝に関わってきた D. ナツァグドルジは、1930 年 1 月に書いた *Ĵalaγučud-un ünən* (ザローチャーディーン・ウネン) という作品の中で、『ザローチャーディーン・ウネン』紙がその一面の上部に「万国のプロレタリア団結せよ」とラテン文字で記したことについて、それが「古い時代の未開の文字を放棄して、革命とインターナショナルの文化の文字を使用しはじめる号令となった」と書き、伝統的なモンゴル文字を「古い時代の未開の文字」(*qayučin-u бүдүгүлiг үсүг*) とし、ラテン文字を「革命とインターナショナルの文化の文字」と称賛した¹⁰。これは、D. ナツァグドルジという一作家の見解だけではなく、実際、1930 年にモンゴル人民共和国でラテン文字導入を決めるにあたって、モンゴル人民革命党第 8 回大会で伝統的なモンゴル文字を「古き教義の残滓の一部であり、新しい文化の発展に不都合なモンゴル文字」と表現している¹¹。

モンゴル文字とラテン文字をめぐる議論の背景には常に「古い」と「新しい」の対比の構図が見られ、当時、「古い」伝統的なモンゴル文字を使用していたモンゴル人民共和国で行われたラテン文字化のもつ意義は、共産主義一般の「革命性」よりもむしろ、ラテン文字自体がもつ「近代性」にあったのではない。ここで「近代」とは伝統的な遊牧生活文化を営んできたモンゴル社会が外国、または他の民族から直接、あるいは間接的に西洋諸国の社会的、政治的、文化的影響を受けることを意味し、または、その影響を指す意味合いがある。この点は、横文字であるラテン文字の国際性を主張し、象形文字で縦に書く漢字を時代遅れの文字と批判した中国の共産主義者たちが行った中国語のラテン化の思想と共通するところがある。こうした中国語のラテン化は、ソ連の国際共産主義運動と決別してからもその意義を失わなかった。実際、中国の漢字に対するラテン化の理念は 1980 年代まで続いた。

すなわち、モンゴル人民共和国にとってラテン文字化は、旧ソ連の諸言語一般とは異なり、縦書きの

古い文字から解放されるための、実用性のある、現実的意義をもつ科学技術の導入に通底するものであった。今日ラテン文字の延長上にあるキリル文字を批判する際、キリル文字がもつ社会主義革命的な側面、すなわちその「革命性」の責任を追求するあまり、この文字がもつもう一つの側面である「近代性」を忘れてはならない。モンゴル人民共和国の発展において、車の両輪のような「革命化」と「近代化」は、現在その前者の「革命化」が否定されたとしても、後者の「近代化」は現在も今後も否定できないものである。キリル文字に対する評価も同様であり、その「革命性」を否定したところで、この文字がもつ「近代性」というもっとも重要な意義は否定しえないものであろう。

こう考える根拠として、その時まだ社会主義革命の影響をあまり受けていなかった、同じモンゴル文字を使用する内モンゴル側の知識層や海外にいた留学生たちの視点を提示することが可能である。

内モンゴルにおける文字のラテン化は、グンセンノロブ以後、内モンゴル人民革命党の創設者の一人であったメルセー(郭道甫)が 1920 年代、フルンボイル副都統公署公立学校校長を務めていた際にラテン字母でダゴール語の文字を作成したことで知られているが、その文字は日本の満洲国支配により使用禁止となった¹²。この試みは、共産主義者であったメルセーという人物の思想や行動からみてソ連やソ連にいた中国の共産主義者たちの影響を受けていた可能性は否定できない。しかし、中国の国民政府時代にモンゴルの未来を議論したことで知られる『新蒙古』という雑誌には、例えば、「新しいモンゴルを建設する道はどうあるべきか」という文章の中で、モンゴルの文字問題について次のように論じている¹³。

モンゴルが進歩するうえで大きな障害になっているのは文字である。(中略)このような習いにくい道具はモンゴル文化が停滞して進まない一大要因である。そのため、モンゴル人は実際に新しい文字を創造する必要がある。(中略)「モンゴル語ローマ字」を使うべきである。その理由は「漢語(いわゆる国語)

彼らは、ラテン文字のモンゴル語への導入をまさに近代化のプロセスや科学の導入としてとらえ、外国で発明された列車がモンゴルの草原を走っていることを例にあげて、科学には国境がないと主張した¹⁴。それは魯迅を含む中国の著名な知識人たちが「文字はいわば交通機関のようなものである」と言ったのと同じであった¹⁵。彼らチョグジラン、セチンバト、チンゲルタイ、ウルジーブレン（写真1）は、「新しいモンゴル文化を振興させるために新しいモンゴル文字を使用すべきであるという論」という文章を発表し、「新しいモンゴル文字」の表記法を公表した。彼らはまさに「新しい時代」にふさわしい「新しい文字」としてラテン文字を選んだのであった。（図1, 2）

左より二人おいてチンゲルタイ、チョグジラン、ウルジーブレン、セチンバト（『清格爾泰文集1』内蒙古科学技術出版社、2010年より）

U	u	ü	O	ö	ü	U	ü
Nu	nu	nü	Nö	nö	ü	Nü	nu
Hu	hu	hü	Hö	hö	ü	Hü	hu
Gu	gu	gü	Gö	gö	ü	Gü	gu
Ku	ku	kü	Kö	kö	ü	Kü	ku
Bu	bu	bü	Bö	bö	ü	Bü	bu
Fu	fu	fü	Fö	fö	ü	Fü	fu
Su	su	sü	Sö	sö	ü	Sü	su
Shu	shu	shü	Shö	shö	ü	Shü	shu
Zu	zu	zü	Zö	zö	ü	Zü	zu
Lu	lu	lü	Lö	lö	ü	Lü	lu
Mu	mu	mü	Mö	mö	ü	Mü	mu
Tu	tu	tü	Tö	tö	ü	Tü	tu
Du	du	dü	Dö	dö	ü	Dü	du
Chu	chu	chü	Chö	chö	ü	Chü	chu
Ju	ju	jü	Jö	jö	ü	Jü	ju
Yu	yu	yü	Yö	yö	ü	Yü	yu
Ru	ru	rü	Rö	rö	ü	Rü	ru

Olan Monggol bidener
 Ontagsan echehen sergeye
 Oloa turu gi baigologad
 Orto odagan jirgajagayn.
 × × ×
 Aro uber hoyar gebechu
 Aimag Ogsaga nigen bishui
 Adali bar eguni medebesu
 Adabashi hamtdo gi eriltai.
 × × ×
 Baga in chag tur yagon hine
 Bato sorgol i sorolchiya
 Bahan idershibesu yagon hine
 Bagator erdement bololchiya
 Sorolga in tog an ergun mandolon
 Srogechi bidener hugilichiju
 Sortal erdem en bolbasorolon
 Soyorhalto teuhe en shinedgeye
 A hui hu
 Shinedduhu Monggol en hei mori gi

図2 「新モンゴル文字」表記例（部分）¹⁴

このように、モンゴル語の文字改革における「新文字」という呼び名には文字自体が新しいというよりも、モンゴルにとっての新しい時代を迎えるために、文字改革に未来への期待をかけていたことが観察される。実際、現在のモンゴル国では、キリル文字を「新文字」と呼ぶことに対し、「キリル文字はモンゴル文字より古いので、その呼び方は間違っている」と主張する人もいるが、キリル文字がモンゴル人民共和国で「新しい時代の文字」として導入されたということは、ここでの「新しいモンゴル文字」と共通であり、実際、モンゴル人民共和国での「新文字」は「新しいモンゴル文字」の省略形である。そのため、「シネ・モンゴル」とも呼ぶ。

東京でモンゴル人留学生たちによって作成されたモンゴル語のラテン文字表記体系は図1の通りであった。彼らは留日モンゴル人学生たちが発行していた雑誌にそれを公表するにあたって、「モンゴルの文化教育を急速に進展させるためにはどうしてもしなければならないことであり、昔から使ってきた文字を使わず、別の文字を使おうとしているのは、目前の理由によるものではなく、将来振興する大モンゴルのためである」と述べている¹⁶。

ところで、その執筆者の一人である内モンゴル大学教授のチンゲルタイは半世紀前の自分たちの行動について次のように述べている¹⁷。

わたしは語文工作¹⁸に従事することをまったく考えていなかったが、偶然のことで学生時代に「文字改革」という厄介なことに触れてしまったのだ。まさに「生まれたばかりの仔牛は虎を恐れない」というものだった。

つまり、1940年代はじめ、日本の東京に留学していた青年たちは、民族の文化教育の発展をいかに図るべきであるかということについて常にいっしょに議論していた。議論の中でモンゴル文字の欠点について話していたが、話せば話すほどモンゴル文字の改革が必要であると考えられるようになった。その結果、数人が連名で文章を書き、留学生の雑誌に掲載した。題目は「モンゴル族の新しい文化の発展のために新しいモンゴル文字が必要である」であった。

文中にはモンゴル文字の欠点である語頭、語中、語末の形が違うこと、発音の弁別ができない文字があること、横書きできないこと、国際的に通用する新語術語の表記が不便であることなどを述べた。そして、あるラテン文字化方案を提示したが、実際、この方案はただモンゴル文字をラテン文字で書き換える方案にすぎなかった。事後考えてみたらそれはたいへん粗末で幼稚な方案だった。今考えてみればまったく取るに足らないことである。ところが、それがその後のわたしにとって文字改革に関心をもつ契機となったのだ。当時は民族の文化発展の加速への願望から真剣に取り組んだ。文字の科学化が立ち遅れた民族の先進民族行列への加入を早めると考えていたからだ。

「新しいモンゴル文字」の創造にそれだけ熱心であった若いころの情熱と努力を「取るに足らない」と結論付けたチンゲルタイのこぼの背景には、文字こそ変えなかったものの、伝統的な古いモンゴル文字を近代的社会生活にある程度機能できるまで運用できたその後の内モンゴルの自信が窺われる。新しい時代の識字率向上のため、1945年以降の内モンゴルでは、モンゴル人民共和国でのモンゴル文字の改善使用の方法と経験を学び、動詞の時制語尾や特定の格語尾と接続詞を話しことばに合わせて表記したほか、ある特殊な単語を口語の発音に近い形で書くようにした¹⁹。そして、長母音の表記法など話しことばとずれている書き方についても話しことばの発音で読むように教え、モンゴル語教育に「言文一致」を導入することにより、モンゴル文字が抱えていた一部の問題を解決できた。その実践と実現に対するチンゲルタイの貢献度は高い。1949年に戦後の内モンゴルで初めて出版されたチンゲルタイによる『モンゴル語文法』には、*ügečilejü bičijü ügečilejü ungsiqu tuqai*（口語化して書き、口語化して読むことについて）の項目が設けられ、「文語をどう口語化して読むかについて」具体的に述べられている²⁰。モンゴル文字によるモンゴル語の口語化表記は、1930年に北京の蒙文書社から出されたハラチン出身者施雲卿の『蒙古語会話篇』にも見られ、

施雲卿は1936年に日本の文求堂から出した『現代蒙古語』でも、例えば *ayuljaysan* → *auljisan*, *ayulan-du* → *auland*, *ayuyad* → *ayiyad* のように表記している。上記のいずれの例もまさに、「現代モンゴル語」創出への工夫と努力であった。

チンゲルタイのことばの背景には、後述するようにもう一つ重要な要因があった。それは言語の近代化が直面する規範の基準ないし標準語設定の問題であった。チンゲルタイの上記『モンゴル語文法』の末尾にも記述されたように、彼が内モンゴルに積極的に導入したのはモンゴル人民共和国の著名な言語学である Sh. ロブサンワンダンの学校教育向けのモンゴル語文法書であった。古典的なモンゴル語文法に比べ、これは「言文一致」を目指した文法である。つまり、現代モンゴル語における「言文一致」の「言」がハルハ方言＝モンゴル人民共和国のことばを基盤にするようでは、話しことばの状況が複雑な内モンゴルでは文字改革は難しい問題を抱えることになる。後述するように、ハルハ方言と大きく異なるチンゲルタイの出身地を含む内モンゴル東部のモンゴル人にとってそれは現実の問題であった。そのため、終戦直後、内モンゴルでの新文字（キリル文字）教育に積極的に取り組んだチンゲルタイは、1955年に内モンゴル自治区など中国領内のモンゴル語地域がモンゴル人民共和国の新文字を公式に導入した時にはすでに「挫折」していた。

二. 第二次世界大戦後の内モンゴルにおけるモンゴル語新文字の学習と導入

1941年にモンゴル人民共和国で伝統的なモンゴル文字をキリル文字に換える文字改革が行われ、その文字をシネ・ウセグ（新文字）と呼んだ。新文字はモンゴル人民共和国の新しい文化の象徴でもあったため、モンゴル人民共和国に学ぶことを志す内モンゴル側にとって、新文字の学習は、個人や団体を問わず取り組まなければならない重要な課題となった。1945年8月以降内モンゴル側で創刊された多くの新聞に新文字学習欄が設けられ、内モンゴル自治政府が成立した1947年5月以降も、自治政府機関紙の *Öbür mongyul-un edür-ün sonin*（内モン

ゴル日報）と内モンゴル日報社発行 *Arad-un medel*（人民の権利）誌に長期にわたってモンゴル語新文字学習欄が精力的に組まれてきた。

Öbür mongyul-un edür-ün sonin 紙には、1947年12月10日に「内モンゴル軍政大学第二団がモンゴル新文字を盛んに学んだ成果」という報道があった。それと関連があることだろうが、チンゲルタイは上記の回想を続け、次のように述べている²¹。

そのような経緯（学生時代のラテン化の試み——引用者）があったため、解放後、スラブ（キリル——引用者）文字による新しいモンゴル文字に出会ってわたしはたいへん賛成した。上部の許可により1946年から1948年に自治学院と内モンゴル軍政大学で新しいモンゴル文字の教育を行った。新モンゴル文字の教材を編集するために、わたしたちは手に入ったただ一冊の露モ辞典をばらして分担でカードを作成し、新モンゴル文字の語彙集を作った。当時はカードや手写し本の形でみんなが共同で使用するしかなかった。

同紙は、1948年4月2日から *Mongyul sin-e üsüg*（モンゴル新文字）欄にそれまでの「連載」として、*üsüg qolbuqu arɣ-a*（文字の結合法）を4月16日まで7回連続した。4月21日と23日は「モンゴル新文字字母」という同じ文字表が2回連続で掲載された。4月26日は「内モンゴル人民解放軍のシベト特攻隊が朝晩休まずに新モンゴル文字を学んでいる」ことを報道している。同じく、4月26日から *sin-e üsüg-ün kičiyel*「新文字の授業」欄が開始し、6月21日まで合計23回掲載された。続いて6月25日からは *Mongyul sin-e üsüg-ün tobči dürim*（モンゴル新文字簡略正書法）欄がスタートし、9月27日までに合計34回連載された。

Arad-un medel 誌では、「1945年8月15日に解放された内モンゴルの人民は新しい文化を短期間内に学びたいという差し迫った願望があり、古いモンゴル文字はそれを満足させることができない。今日の新しい文化の需要を満たせる文字は、モンゴル人民共和国科学アカデミーが作成し、本国の人民の間で短期間に急速に普及できた新モンゴル文字である」とキリル文字を位置づけ、「人民大衆の話しことば

に合わせた」というキリル文字の作成原理と「音声学、形態論に基づき、伝統を配慮した」モンゴル語新文字の原則²²を紹介し、モンゴル人民共和国科学アカデミーの Ts. ダムディンスレンが作成したモンゴル語新文字正書法の連載を始めている²³。これらの定期刊行物ではいずれも独学で新文字を学ぶ読者の質問に答える形で、新文字についての内容を掲載し、モンゴル語新文字の学習を奨励した。

中華人民共和国建国直後の状況については、1950年夏、北京のいくつかの大学がフルンボイルなどで行った調査による次の報告がある²⁴。

終戦後、内モンゴル政府の教育部門は、計画的に文字改革を行い始め、まず、古い文体を話しことばの文体に直し、新聞、雑誌を話しことばの文体にした。それにより多くの作品＝新しい詩が生まれた。（中略）次いで、文字の改革を行ったが、新文字が教えられる人材が足りなかったため、短期間内にあまりよい効果が得られず、1949年に、内モンゴル教育省は新文字の試行を一時停止した。1950年4月からは中国教育省の指示に従い、あらためてモンゴル語新文字学習を推し進め、まず、中学校での教育を試み、もし、可能ならさらに広めることにした。

1953年5月16-30日に、中国共産党中央委員会内モンゴル・綏遠分局主催「内モンゴル・綏遠モンゴル語工作会議」（通称：内モンゴルのモンゴル語工作第一回会議）で、同分局宣伝部副部長の胡昭衡が行った報告の中で「モンゴル語文研究」の一環として、「新文字研究問題」が取り上げられたほか、同宣伝部所属シンクタンク組織としての「蒙古語文工作処」²⁵に勤めていた上記チンゲルタイが行った「モンゴル語文工作に存在する若干の問題について」という報告の中で、モンゴル語新文字の問題については、「全体の傾向から言えば、新文字を学び、使用するのとは確定的なことだ。しかし、現在ただちに新文字を使用することはできない」と述べ、その理由について、次の3点を挙げている²⁶。

- ① 新文字を使用する前に、内モンゴル地域のことばを調査し、民族の共同語にかかわる諸問題を今

後解決しなければならない。

- ② 上述の問題を解決したあと、新文字方案を決定する。そのアルファベットは内モンゴルのことばの発音を完全に表記できるべきで、その正書法は内モンゴルのことばに適合しなければならない。
- ③ 上述の二つの問題を解決した後、教員と教科書を整える必要があり、徐々に取り入れるプロセスが必要である。

そのため、われわれは現在一方では、旧文字を積極的に普及させ、教育方法を改善し、文字を改善する。他方では、新文字にかかわる多くの問題の研究にただちに着手し、新文字を普及させる条件を備えるため努力しなければならない。

1954年5月、民族語言文字研究指導委員会および中央人民政府民族事務委員会による「まだ文字を持たない民族を助けて文字を創造する問題に関する報告」が政務院によって批准された。それには「ソ連とモンゴル人民共和国に隣接するいくつかの民族はその意志によりロシア文字を使用することができると決定された。それを受け、オラーンフーは、1954年9月にソ連の言語学者セルジュチェンコ (G. P. Serdyuchenko) 教授らに、内モンゴルがモンゴル人民共和国と同じ新文字を採用する予定だと語っていた²⁷。具体的に、オラーンフーは次のように述べたという²⁸。

歴史的に見てモンゴル文字は比較的優れている。しかし、改革する必要がある。現地（内モンゴル——引用者）の人々はモンゴル文字に慣れているため、当初は文字改革に反対する人もいた。そのため、政府（内モンゴル自治区人民政府——引用者）はただちにこの仕事を進めず、ただ研究し、準備を進めていた。（われわれは）モンゴル人民共和国と同じ新文字を採用する予定である。

セルジュチェンコは1954年10月から1957年8月まで中国政府の招聘により中国科学院と中央民族学院の言語学顧問を務めていた人物で、同じくソ連からの専門家として同じ時期に中国でモンゴル諸語の研究調査をしていた妻のトダーエワー (B. Kh.

Todaeva) はモンゴル系のカルムイク自治共和国出身のモンゴル語学者だった。そのため、内モンゴルにおけるキリル文字導入の問題にソ連の顧問と専門家の支持や了解はなかったのかという疑問を抱いた筆者は高齢のチンゲルタイ教授の自宅を訪れ、聞き取り調査を行った。

その結果は、この問題に関する彼らの影響については否定できないが、彼らがこの問題について直接コメントすることを避けていたこと、そして、この文字改革がオランフー主席の意志によるものであったことを改めて確認できた。オランフーは、モンゴル人民共和国の新文字を導入する目的については、「一方では、モンゴル人民共和国の進んだ文化を学び、他方では、毛沢東思想をモンゴル人民共和国に宣伝するためだ」と、二つの面を強調していたという²⁹。後者はキリル文字の導入を中央政府に納得してもらうために強調しなければならないことだったかどうか、この問題については、それ以上チンゲルタイに質問を突き詰めることは避けなければならなかった。また、オランフーは、内モンゴルの文字改革について、当時中央人民政府副主席だった劉少奇に相談していた³⁰。劉少奇は文字改革が成功しているアジアの隣国、モンゴル、朝鮮、ベトナムの経験を研究するよう、1950年2月に中央宣伝部の責任者らに指示していた³¹。

そして、1955年7月22日に内モンゴル自治区人民委員会による「モンゴル新文字普及に関する決定」³²が發布され、9月1日に自治区副主席のハーフンガーが『内モンゴル日報』に「新文字普及の重要な意義」という文章を掲載した。それにより、終戦以来試行的に、非公式に行われてきた新文字学習運動が公式に、かつ全面的に実施されるようになった。それまでの内モンゴルにおける新文字の学習状況について、内モンゴル自治区語文工作委员会副主任のエルデネトグトフは次のように述べている³³。

モンゴル人民共和国で出版された新文字の書籍は「9月3日」の解放以降、わが国のモンゴル族人民におおいに歓迎され、そのために新文字を学んだ人が多かった。新文字を学ぶことに内モンゴル自治区の

党と政府がたいへん注目し、重視していたため、われわれのある学校と研修クラスで新文字を教えたほか、1947年より *Arad-un medel* (『人民の権利』)、*Sin-e Öbür mongγul* (『新しい内モンゴル』) などの雑誌で新文字について紹介していたほか、新文字の読み方・正書法などの本を出版していた。1951年からハイラル、オランホトのモンゴル小学校で実験的に新文字を教えていたことがある。ある地域では新文字の学習によって読み書きができないことをなくし、多くのモンゴル語工作者が業務の実践において新文字を学び、研究し、使用してきたため、新文字普及に携わる多くのスタッフが用意されている。そのため、新文字はわが内モンゴルにおいてそれなりに影響と基盤をもつようになっている。(中略)

このように、モンゴル語新文字がわが国のモンゴル族の言語に完全に応用できることを、内モンゴル自治区における9年間にわたる新文字の学習、研究、重点的普及の事実が証明している。これはモンゴル人民共和国とわが国のモンゴル民族間の言語の共通性によるものである。

同文においてエルデネトグトフは、内モンゴル自治区政府の「モンゴル新文字普及に関する決定」の意義とモンゴル語キリル文字のよさを強調し、内モンゴルにおける新文字普及の現状について、教員養成の人数、キリル文字の出版物、宣伝、調査などの状況を詳しく述べている。内モンゴル語文研究会による *Mongγul kele bičig* (『モンゴル語文』) 誌は、1956年第三季に新文字に関する特集号を組み、政策実施及び学術面から新文字普及のキャンペーンを行った。エルデネトグトフの上記内容もその一環であった長文からの引用である。

1956年5月にはフフホト市で「モンゴル語族言語科学研究討論会」が開催され、中国国内のモンゴル語とモンゴル系の言語を話す地域や民族からの代表を含め、198人が参加した。1957年2月に新疆ウイグル自治区でも、ウイグル語、カザフ語、モンゴル語、キルギス語、シベ(シボ)語の5言語にキリル文字を導入することが公布されたため、モンゴル人民共和国のキリル文字の普及は内モンゴル自治区

のみならず、新疆ウイグル自治区内のモンゴル人地帯、そして、黒龍江省と吉林省に居住するモンゴル人の間でも行われた。

モンゴル語キリル文字の普及について、オランフーを書記とする中国共産党内モンゴル自治区委員会は1956年の段階で次のような報告をしている³⁴。

新文字を推し進める仕事は一定の成績をあげ、党の民族語文を発展させる政策を積極的に執行し、新文字を推し進めるうえでの認識を統一した。この期間は新文字を推し進めるための準備作業を加速させ、ならびに全面的に推し広めるために一連の準備作業を進めた。(具体的には)数多くの教員を訓練し、各種の新蒙文書籍を出版し、モンゴル語文の研究を強化した。とくに、「モンゴル語族言語科学研究討論会」の開催は、モンゴル語新文字を推し広める科学的基礎を固め、ダゴール語の文字作成を定めるとともに、そのほかのモンゴル語族の民族についても言語調査に協力できた。これによりモンゴル語新文字を全面的に推し広めるための有利な条件が整った。モンゴル語新文字によって古いモンゴル文字を取りかえることはモンゴル民族の文化革命の重要な部分であり、この歴史的な任務を完成することは、モンゴル民族の文化的水準を高めるために、内モンゴル自治区の社会主義建設のために、モンゴル民族が先進的民族に追いつくために重要な役割を果たすものである。

このように、オランフーが進めたキリル文字改革は、単に内モンゴルのモンゴル語を対象にしたものばかりではなく、ダゴール語、ドゥンシャン(東郷)語、モンゴール(土族)語、バオアン(保安)語など、モンゴル諸語³⁵を話すモンゴル系の民族語を包括するものだった。

三. キリル文字導入問題に関する観点の違いとキリル文字導入の中止

上に見てきた通り、内モンゴル自治区をはじめとする中国領内のモンゴル諸語の表記にモンゴル人民共和国のキリル文字を導入したのはオランフーの意図であった。しかし、オランフーの意図や内モンゴル自治区政府の決定に対し、文字改革政策を実

施する側の研究者であったチンゲルタイは、自らを文字改革問題における「穏健派」³⁶だと位置づけ、キリル文字の導入自体に積極的ではなかった。それは彼がキリル文字を教えていた経験による方言意識の違い及び「ソ連の経験からみて、内モンゴルの文字改革問題は中国の文字改革との関連で考えるべきだ」³⁷と考えていたからであった。このばあい、「ソ連の経験」とは何であったのか。それについて、チンゲルタイは次のように述べている³⁸。

日本のある雑誌に転載されたプラウダ(1939年4月7日)の報道によるソ連のブリヤート・モンゴル自治共和国ソヴィエト主席 G. ベリガエフの講話内容はだいたい次のようである。1941(「1931」の間違いであろう——引用者)年にラテン字母による新文字を採用してから多くの問題に直面した。ロシア語とブリヤート・モンゴル語の併用の状況下において少なからず矛盾が発生した。ロシア語の学習や共同成分の書写において多くの不便があった。ラテン字母はブリヤート・モンゴル語を書写するにあたってもスラブ(キリル——引用者)文字に及ばない。そのため、われわれはスラブ文字に改めるよう決定した。この決定は人民群眾と知識人たちの歓迎を得た。

もし、ソ連のロシア文字環境においてラテン化新文字の使用に矛盾が発生したなら、将来(中国の——引用者)ラテン字母環境でスラブ新文字を採用することにも矛盾が発生するではないか。

実際、当時ブリヤート・モンゴルでのキリル文字導入はどういう背景で行われたのだろうか。1937年にソ連で大粛清が始まり、ブリヤート・モンゴル語のラテン文字表記を精力的に進めてきた前記バザル・バラディンをはじめ、ブリヤートの言語政策に関わった人々の多くが命を落とした。ブリヤート・モンゴルの言語政策の研究で知られる荒井幸康によれば、「キリル文字化の波がブリヤート岸に押し寄せるのは、それ(大粛清——引用者)からほどない1938年6月のことである。1938年6月20日、参加者55人を擁するブリヤート国立言語文学歴史研究所の言語会議が開催され、ベリガエフがラテン文字からキリル文字への文字の変更について発表した。

すでにこの会議が始まる前にキリル文字化案がサンジェエフ（中略）らによって提出されていた。（中略）最終的にこの案でブリヤート語の文字をキリル文字とすることが、ブリヤート・モンゴル自治共和国最高ソヴィエト令によって1939年5月1日に『人民の要求を考慮し』決定された」³⁹。

モンゴル人民共和国のキリル文字を中国領内のモンゴル語に公式に導入するにあたり、その正書法をそのまま採用するかどうかについて、オランフーはなるべくそのまま採用できるよう勧めていたようだ。それが彼の次のことばにも反映されている⁴⁰。

研究してくれ。ハルハ（モンゴル人民共和国——引用者）の新蒙文はそのまま持ってくることはできないのか。字母も発音も変えずにだ。

しかし、チンゲルタイはキリル文字を導入するにしてもそのままではなく、内モンゴルの言語上の特徴を配慮して一定の修正をするべきだという考えをもっていた⁴¹。このような考え方については、ゲレルチョグトが「文革」後に述べたことが議事録に残っている⁴²。ゲレルチョグトは若いころモンゴル人民共和国に短期留学したことのある内モンゴルの著名な作家で、モンゴル語をめぐる政策についてその議論や業務に深くかかわっていた人物である。

内モンゴルで伝統的なモンゴル文字をスラブ文字に改革するにあたり、なるべくモンゴル人民共和国の新文字と一致させようという正式な決定が党と政府から出されていた状況においても、内モンゴルの語文工作陣営は、ロシア文字の字母をそのままモンゴル語にもってくることに賛成せず、自民族言語の実情に合わせるべきだという意見を出していた。

この論述は、「1950年代に、内モンゴルはモンゴル人民共和国の言語文字をそのまま導入したものではない」という論点を立前に強調した弁解だったが、一方では、モンゴル人民共和国に学んだことを正当化するための弁論であった。

このように、内モンゴルにおけるキリル文字の正書法について、自治区政府側とモンゴル語研究者側とでは意見の食い違いがあったが、実際は、モンゴ

ル人民共和国のキリル文字正書法がそのまま導入され、教育が実施された。正書法の問題については、1957年7月にウランバートルで行われた「モンゴル語科学討論会」でも中国側の代表＝実質、内モンゴルの代表であったエルデネトグトフ、チンゲルタイ、ゲレルチョグト、ソドノムユンルンらは、モンゴル語キリル文字の正書法は、モンゴル語の特徴と需要により再審議すべきだという意見を出し、それが人民共和国側の研究者たちにも支持された。しかし、それが「正書法の文字体系を決めることは、学術問題ではなく、党と政府が決める政治問題だ」と（モンゴル）政府当局に拒否された⁴³。この国際会議への参加について、中国共産党内モンゴル自治区委員会宣伝部副部長のトゥグスは、「モンゴル語新文字のアルファベットをモンゴル人民共和国と同じものにし、アルファベットの修正及び正書法の原則の問題を研究しなおすため、モンゴル人民共和国で行われる言語研究会議に代表を送る予定である」と、会議参加の目的をはっきり述べていた⁴⁴。

実際、モンゴル人民共和国政府側のこの判断は、同国でキリル文字が導入された15周年の節目に中国側のモンゴル人地帯でもキリル文字が導入されることになり、それを受けて人民共和国側のモンゴル語研究者たちの間で展開されたキリル文字正書法を見なおす議論に終止符を打つものだった。その討論に寄せられたモンゴル人民共和国の学者たちの数多くの論文を内モンゴル大学モンゴル語文研究室は「キリル文字の問題及びキリル文字正書法集」のような形式で1977年に「モンゴル語研究参考資料」（内部資料）として印刷している⁴⁵。

ところが、1957年7月から8月にかけて青島で行われた「全国民族工作座談会」で周恩来首相は、各民族語の文字記号の統一を指示し、1957年11月には「漢語拼音方案」が採択された。それにより、少数民族の文字改革も漢語と同じ「漢語拼音方案」を用いるという方針が実行に移されるようになった。1958年1月に周恩来による「当面の文字改革の任務」という報告が行われ、1958年3月に内モンゴル自治区人民政府は「新文字の普及を停止し、古い文字の学習と使用を強化することに関する決議」を

発布した。

このように、中華人民共和国建国以前から目指されてきた内モンゴル側のモンゴル人民共和国との文字統一のプロセスが、中国の国家政策により中止され、ラテン文字による改革の見通しが立たないまま、「モンゴル文字改革委員会」が「モンゴル語文工作委員会」に改められた。

多様な方言を抱える内モンゴル側にとって、キリル文字への移行はモンゴル人民共和国のキリル文字の導入自体よりも、口語に基づくキリル文字正書法の導入が重要な意義をもっていた。それゆえ、その後「漢語拼音方案」による文字改革が実行されたとしても、モンゴル人民共和国のキリル文字の正書法がその基盤になり、モンゴル人が求めていたモンゴル語諸方言の統一は進められたであろう。実際、同年12月には内モンゴル大学によるモンゴル語のラテン文字化の研究が初歩的な成果をあげたと報じられ⁴⁶、1960年10月には、内モンゴル自治区語文工作委員会編『新蒙文正字法』という「試用本」が「内部発行」として出された⁴⁷。ラテン文字による「新蒙文」であろうと、この「正字法」が現代モンゴル語の正書法である以上、モンゴル人民共和国のキリル文字正書法とは大差がつけられず、現代モンゴルの発音におけるもっとも肝心な部分である「あいまい母音」(balarkhai egshig)の表記法は、分類と用語を含め、キリル文字正書法が採用されている⁴⁸。

一方で、1950年代後半から内モンゴルで進められたモンゴル語の文字改革のプロセスは、事実上、中国語の文字改革の問題と深い関連があった。今日、内モンゴルにおけるモンゴル語がラテン文字ではなく、モンゴル文字を使用し続けているのは、中国語がラテン文字化の方針を改め、漢字を使い続けてきたことと深い関係がある⁴⁹。

ところで、1950年代に内モンゴルで進められてきたキリル文字の廃止政策について、内モンゴルの知識人たちの反応はどうだっただろう。モンゴル文字を使い続けてきたことをありがたく思う人が多い中、キリル文字普及の廃止について鋭い批判をしていた人たちのことはほとんど知られていない。前記

作家のゲレルチョグトは「文革」直後、「青島会議」について次のように述べている⁵⁰。

1957年秋に青島で開催された全国民族工作会议では、各民族の言語の実情について具体的に分析せずに、また、各民族人民と広範に討論せずに、少数民族の文字改革を原則上一律漢語ピンイン字母に統一すると定めた。この一つの決定がこれまで一貫して堅持してきた民族平等の原則に基づく正確な民族語文政策を理論から動揺させ、民族語の実践においてさまざまな影響を及ぼした(中略)。青島会議の決定が正確であったか、否かおよびその影響の問題について新たに検証することがきわめて重要である。わたしが思うには、その会議での決定の主な問題は、マルクス主義の民族平等、言語平等についての原則を否定し、また、動揺させたことだ。

少数民族語の文字改革のラテン文字化を決定したこの会議を中国政府によるその後の「左傾路線」言語政策、つまり、同化政策の始まりであるとみたのはゲレルチョグトだけではなかった。しかし、ゲレルチョグトがこのような大胆な主張ができたのは虐げられた民族と文化の復活を強く強調できた「文革」直後のタイミングにおいてであった。

20世紀初期から試みられてきたと考える内モンゴルにおけるモンゴル語の文字改革は、約半世紀後に同胞の国モンゴル人民共和国の新文字＝キリル文字を正式に導入する形で実現したが、中国の対少数民族政策の変更により3年足らずで中止となった。そして、「漢語拼音方案」をモンゴル語表記に導入するまでの「臨時対策」として、伝統的モンゴル文字の学習が奨励された。しかし、ネガティブな側面が強調され続けてきたモンゴル文字を今度は逆の立場から宣伝しなければならなかったため、新文字を熱心に学んでいた一般のモンゴル人から見れば、文字改革の「新」と「旧」の関係を逆転させ、「新文字」への理念を無視したことになる。

その後の状況は、中国における拼音の正式文字としての導入による漢字廃止の問題と平行し、流動的だった。つまり、漢字のラテン化という中国の文字改革問題と同様、モンゴル文字もいずれ「漢語拼音

方案」によってラテン化されるというあいまいな方針が取られたため、1966年4月に内蒙古自治区語文工作委员会からモンゴル文字を部分的に改善する「モンゴル文字改善案」が実施され、その後中止された。中国では1977年12月に「第二次漢字簡化方案（草案）」が発表され、1986年6月に同方案は使用停止になった。こういう意味で、モンゴル文字の部分的改善は、漢字の簡体化に類似していると言える。ただし、漢字の簡体化は実行され、成功しているが、モンゴル文字の部分的改善は、「伝統を破壊するもの」と考えられ、その後あえて実施されることがなかった。

おわりに

2001年1月1日から実施された「中華人民共和国国家通用语言文字法」により漢字（「規範漢字」）が中国で「国家通用文字」として法的に定められている現在、中国が漢字を廃止する方向性はほぼなくなったと言える。「国家通用语言文字法」の施行に伴い、内モンゴル自治区でも2005年5月1日から「内蒙古自治区蒙古语言文字工作条例」が施行され、「モンゴル文字」は「自治権を執行するための重要な道具」と定められた。そのため、「漢語拼音方案」によるモンゴル語のラテン化も理論的にはほとんどなくなったと考えられる。つまり、漢字のばあいと同様、1950年代の文字改革の結果、移行期の「臨時対策」として使用し続けられてきたモンゴル文字がこの「条例」の施行により、正式な文字としての「法的」根拠を得たものと考えられる。しかし、実際、「条例」の規定は法的根拠にはならない。

中国でラテン文字の導入による漢字廃止の構想が事実上なくなった背景には、教育の普及による住民の識字率の上昇と経済発展、そして、漢字のコンピューター化が順調であったという実績があった。中国におけるモンゴル語の文字改革の問題を中国の漢字の文字改革の問題と関連付けて論じた研究はほとんどないが、漢字廃止もモンゴル文字廃止も1950年代からの文字改革の「方向性」にすぎず、その実行が具体的に考えられていたわけではなかった。

しかし、その廃止、つまり、ラテン文字＝「漢語

拼音方案」が中国語（中国語のばあいは「漢語拼音文字案」）とモンゴル語に正式な文字として導入される可能性がほぼなくなった現在、1950年代に中国の言語政策により行われた中国領内におけるモンゴル語の文字改革の意義を、漢字の改革のばあいと比較しながら改めて考えてみる必要がある。具体的には、本論で見てきたモンゴル人民共和国のキリル文字の導入はなぜ実現できたのか。また、その廃止はどういう意義をもつものであったのか。「漢語拼音方案」のモンゴル語への導入は可能だったのか。このように、1950年代の中国の言語政策とモンゴル語の文字改革の問題の現実的意義について考えることは、コンピューターと携帯電話のメールが日常生活の通信手段となった現在こそ、縦書きであるために社会的に機能が大きく低下している内モンゴルにおけるモンゴル文字及びモンゴル語書きことばの将来性を探るうえでたいへん重要である。

注

- 1 フフバートル（1997）、22頁。
- 2 呉恩和、刑復礼「貢桑諾爾布」『内蒙古文史資料』第一輯、109頁、内蒙古人民出版社、1962年。
- 3 内蒙古自治区図書館編『建国前内蒙古地方報刊考録』154頁、内蒙古自治区図書館、1987年。
- 4 Sečenbatu, Güngsengnorbu, P. 117, Öbür mongγul-un sinjilekü uqayan tēgnig mergejil-ün keblel-ün qoriy-a.
- 5 フフバートル（1996）。
- 6 荒井幸康（2006）、110-113頁。
- 7 田中克彦（1975）、153-156頁。
- 8 『新蒙月刊』第一号、38頁、1931年1月20日。
- 9 曹伯韓著『中国文字的演变』148頁、生活・読書・新知三聯書店、北京、1952年。
- 10 BNMAU SHINJLEKH UKHAANY AKADEMI KHEL ZOKHIOLYN KHÜREELEN, *D. Natsagdorjiin gar bichmel*, p. 180, Ulaanbaatar, 1988.
- 11 荒井幸康（2006）、110頁。
- 12 『内蒙古大辞典』94頁、内蒙古人民出版社、1991年。
- 13 王開江「怎樣達到建設新蒙古之道」『新蒙古』第二卷、第四期、12-17頁、1934年4月、北平。
- 14 Čoyjilang, Činggeltei, Sečenbatu, Öljeibürin, Sin-e

- mongɣul-un soyul bolbasural-i delgeregülkü-dür sin-e mongɣul üsüg-i kereglebesü jokiqu sigümjilel, *Sin-e mongɣul*, Dörbedüger quyuçay-a, p. 20, Nibbun-dur büküi mongɣulčud-un qural (留日蒙古同郷会学術部 1944 年 東京).
- 15 さねとう・けいしゅう (1958), 44 頁。北京大学学長を務めた蔡元培をはじめ、巴金、魯迅、郭沫若ら文学者を中心とする知識人 688 人の署名による「新文字をおし進めることについての我らの意見」(1930 年代前半)では、「漢字は手おし車、国語羅馬(ローマ)字は汽船、新文字は飛行機のようなものだ」とそれぞれの文字を異なる乗り物に喩えている。
 - 16 前掲 *Sin-e mongɣul*, pp. 19-20.
 - 17 清格爾泰 (1997), 1 頁。
 - 18 主として政府の言語政策の実施や現代語の研究などに従事する中国における職業名。
 - 19 Erdenitoytaqu, Ündüsüten-ü kele bičig-i kereglen kögǰigülkü tuqai nam-un boduly-a-yi ulam tuuštai beyelegülkü-yin tölüge temečejegey-e, “Mongɣul kele bičig” nayirayulqu keltes Bayannaŷur ayimaŷ-un Mongɣul kele bičig-ün aŷil-un jöblel, (1980), pp. 227-228.
 - 20 Čengeltei nayirayulba, *Mongɣul kelen-ü jüi*, Öbür mongɣul-un edür-ün sonin-u qoriy-a, 1949. 筆者所蔵の初版香港手写し版にはページ数が表記されていない。内蒙古自治区人民政府文教部による再版では 192-196 頁。
 - 21 清格爾泰 (1997), 1 頁。
 - 22 ここで「音声学」(dayun-u suryal) は現代語の発音、形態論 (ügen-ü suryal) は語根・語幹の維持、伝統 (jangsil) は書きことばを指す。
 - 23 Öbür mongɣul-un edür-ün sonin-u qoriy-a, *Arad-un medel*, angqaduŷar debter, pp. 59-60, 1948. 4.
 - 24 燕京、清華、北大一九五〇年暑期内蒙古工作調査団編 (1997), 28-29 頁。
 - 25 この「蒙古語文工作処」は、後記「内モンゴル自治区語文工作委员会」の前身であると考えられる。「内モンゴル自治区語文工作委员会」については、「内蒙古自治区蒙古語文工作暫行条例(草案)」(1962 年 8 月 29 日)の「三十九」に「内モンゴル自治区は語文工作委员会を成立させ、自治区人民委员会の語文工作指導の強化に協力させる」と規定し、その「主要職責」について六項目をあげている。ただ、本「暫行条例(草案)」が自治区最初の「蒙古語文工作条例」(最終的な形式も「暫行」と「草案」のままだった)であったため、1950 年代からあった「内モンゴル自治区語文工作委员会」をここで「条例」に追認したものではないかと考えられる。
 - 26 Čengeltei, “Mongɣul kele bičig-ün aŷil-du orusiŷu baiŷ-a kedün asaŷudal-un tauqai” “Mongɣul kele bičig” nayirayulqu keltes bayannaŷur ayimaŷ-un mongɣul kele bičig-ün aŷil-un jöblel (1980), 104-105.
 - 27 清格爾泰 (1997), 4-5 頁。
 - 28 烏蘭夫「和蘇連專家談話紀要 (1954 年)」楊海英編 (2012), 740 頁。
 - 29 チンゲルタイへのインタビュー記録 (2007. 8. 24)。この日付について『清格爾泰文集 1』(内蒙古科学技術出版社, 2010 年) 762 頁には、「2007 年 8 月 23 日、日本の昭和女子大学に教鞭をとるフフバートルが訪れ、モンゴル語の問題について話し合った」とあるが、当日著者に贈呈された献本の日付も「2007 年 8 月 24 日」である。
 - 30 チンゲルタイへのインタビュー記録 (2007. 8. 24)。
 - 31 費錦昌 (1997), 124 頁。
 - 32 1955 年 7 月 12 日に内モンゴル自治区人民委员会第三回会議によって承認。
 - 33 Erdenitoytaqu, “Ündüsüten-ü kele bičig-i kereglen kögǰigülkü tuqai nam-un boduly-a-yi ulam tuuštai beyelegülkü-yin tölüge temečejegey-e — Öbür mongɣul-un öbertegen ŷasaqu orun-u yisün jil-ün tursi mongɣul kele bičig-i kereglen kögǰigülügsen tuqai düngnelte kiged egün-eče qoyisi mongɣul sin-e üsüg-i delgeregülkü tuqai sanal” “Mongɣul kele bičig” yisüdüger quyuçay-a, 1956 on.
 - 34 烏蘭夫「中共内蒙古党委向自治区第一次党代会的工作報告 (1956 年)」楊海英編 (2012), 740 頁。
 - 35 「モンゴル語」を除くこれらの言語は日本のモンゴル語研究では「孤立諸語」と呼ばれている。
 - 36 清格爾泰 (1997), 2 頁。
 - 37 「内蒙古大学清格爾泰同志の書面発言」会議秘書組『内蒙古蒙古語文工作務虚会議簡報』(第三期) (1979. 3. 2), 5 頁。
 - 38 清格爾泰 (1997), 2 頁。

- 39 荒井幸康「1930年代のブリヤートの言語政策——文字改革，新文章語をめぐる議論を中心に——」『スラヴ研究』第52号，171-172頁，2005年。
- 40 烏蘭夫「關於蒙文改革的兩次談話（1956年）」楊海英編（2012），741頁。
- 41 チンゲルタイへのインタビュー記録（2007.8.24）。
- 42 格日樂朝克図（1979.3），18頁。
- 43 格日樂朝克図（1979.3），18-19頁。
- 44 Tegüs, Arban jil-ün tursi ündüsüten-ü kele bičig-i kereglejü kogjigülügen amjilta, *Mongγul kele bičig*, 1957, 6-duyar quyučay-a.
- 45 Öbür mongγul-un yeke surγayuli-yin mongγul kele bičig sudulqu tasuy 1977.
- 46 『光明日報』1958年12月28日 新華通訊社内蒙古分社人民日報内蒙古記者站編印（1958），『内蒙古新聞集』441頁。
- 47 Öbür mongγul-un öbertegen jasaqu orun-u kele bičig-ün aji-un komis (1960) '*Mongγul sin-e üsüg-ün dürim*' Öbür mongγul-un keblel-ün qoriy-a. 本小冊は，内モンゴル言語文学研究所，内モンゴルモンゴル語文専門学校，内モンゴル師範学院，内モンゴル大学が共同で編集し，内モンゴル自治区語文工作委员会より刊行された（Čoyijungjab 2008），514。
- 48 例えば，モンゴル文字の ariki と tamiki などは，arih と tamih ではなく，arhi と tamhi とキリル文字正書法と表記がまったく同じである（上掲 Öbür mongγul-un öbertegen jasaqu orun-u kele bičig-ün aji-un komis 1960, p. 15）。
- 49 フフバートル（2009），388-391頁。
- 50 格日樂朝克図（1979.3），19頁。

参考文献

- 荒井幸康 2006『「言語」の統合と分離——1920-1940年代のモンゴル・ブリヤート・カルムイクの言語政策の相関関係を中心に』三元社。
- さねとう・けいしゅう 1958『中国の文字改革』くろしお出版。
- 田中克彦 1975『言語の思想』NHK ブックス。
- フフバートル 1996「モンゴル語定期刊行物名称考」『日本モンゴル学会紀要』No. 27。

_____ 1997「漢語の影響下におけるモンゴル語近

代語彙の形成——中国領内のモンゴル語定期刊行物発達史に沿って——」（博士学位論文），一橋大学大学院社会学研究科。

_____ 2009「中国におけるモンゴル民族の文字問題——中国語の文字改革との関連性を視野に——」Proceeding of Second International Conference “Past and Present of the Mongolic Peoples” 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，pp. 388-391。

楊海英 2012『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料（4）——毒草とされた民族自決の理論』風響社。

格日樂朝克図「關於五十年代蒙古語文工作狀況的簡單回顧」八省自治区蒙古語文工作協作小組辦公室『蒙古語文工作通訊』（内部刊物），1979年3月。

費錦昌主編 1997『中国語文現代化百年記事（1892～1995）』語文出版社。

汪学文 1970『中共文字改革与漢字前途』国際関係研究所，台北。

燕京，清華，北大一九五〇年暑期内蒙古工作調查团編 1997 呼倫貝爾盟民族事務局整理『内蒙古呼納盟民族調查報告』内蒙古人民出版社。

清格爾泰著 1997『語言文字論集』内蒙古大学出版社。

Čoyijungjab 2008, *Čoyijungjab-un ögülel-ün tegübüri*. Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a.

“Mongγul kele bičig” nayirayulqu keltis.

Bayannayur ayimay-un Mongγul kele bičig-ün aji-un jöblel 1980. *Ündüsüten-ü kele bičig-ün törü-yin boduly-a-yin tuqai bičig matêryal-ud* (nigedüger emkidgel).

Öbür mongγul-un yeke surγayuli-yin mongγul kele bičig sudulqu tasuy 1977. *Mongγul kele bičig-ün suduluyan-u kinalta-yin matêryal* (蒙古語文研究參考資料) dörbedüger emkidgel (dotuyadu-yin matêryal).

Sh. Baraishir 1959, *Üseg bichgee ulam sain bolgokhyn tölöö*, Shinjlekh Ukhaan Deed Bolovsrolyn Khüreeleengiin Erdem Shinjilgeenii khevleliin gazar, Ulaanbaatar.

Ts. Damdinsüren 1957, *Mongol khel bichgiin tukhai*, Ulsyn khevleliin gazar, Ulaanbaatar.

（フフバートル 現代教養学科）